

よさこい祭りの新しいかたち

1180464 鍋嶋 真里奈

高知工科大学 マネジメント学部

第1章 研究の目的と背景

1.1 目的

本研究の目的は、「高知県のよさこい祭りにおいて、もとの祭りの趣旨と現状の相違点を明らかにし、これにより生じている課題を検討すること」にある。

1.2 背景

高知には毎年8月9日(前夜祭)、10日・11日(本祭)、12日(後夜祭・全国大会)の4日間、高知市内9カ所の競演場・7ヶ所の演舞場で約200チーム、総勢は約1万8千人が参加する

「よさこい祭り」という伝統行事がある。ここでは、鳴子を持った踊り子が工夫を凝らし、地方車には華やかな飾り付けをして市内を乱舞する{よさこい祭振会, 1997}。

私は、このよさこい祭りに小学生の頃から参加し、たくさんの興奮と感動、楽しさを味わってきた。しかし、このお祭りがこれからも多くの人に愛されるものであってほしいと願うなかで、この先も長く発展し続けていくための課題も感じるようになった。

60年という歴史を築いてきたよさこい祭りは、どのような人たちが何のために、また、どんな思いで始めたのだろうか。もともとの歴史を探てみると、今のイベント化されたお祭り形態は原点と違うのではないか。もし相違点があるならば、新たな課題が生じているのではないか。これが本研究の本質的な問題意識である。これらを明らかにし、今後のよさこい祭りの発展を検討することが本研究の貢献である。

第2章 歴史

2.1 戦後～1950年代～

「よさこい祭り」は、1954年(昭和29年)に商店街の活性化、観光行事の一環として、地元の商工会議所が主導して、展開されたイベントである{内田, 2011}。なぜ、この時期によさこいが始まったのだろうか。背景には度重なる不幸な出来事

があった。終戦を迎えた1945年、高知市の市街地は米軍の爆撃でほとんどが廃墟と化し、翌年には南海地震が県土全域を襲った{高知新聞2018, }。また、1953年後半から1954年にかけては、農作物の不作、貿易不振、国際収支の悪化、金融引き締め効果などによって全国的な不況に見舞われ、デフレが本格化した。高知県も例外ではなく各方面に深刻な影響を及ぼしたが、行政的には市の都市計画がほぼ出来上がり、市民の生活は次第に落ち着きを取り戻していった。この過程で民衆の心に芽生えてきたものは、心の安らぎと歌や踊りなど娯楽への渴望であった。こうして、不景気風をはねのけ、市民の健康と繁栄を祈願すると共に、夏枯れの商店街振興を促すために、高知市民祭の一環、夏の一大行事として誕生したのが「よさこい祭り」であった{よさこい祭振興会, 1973}。

第1回よさこい祭りには、21団体750人が参加をし、はりまや橋の得月楼前を出発すると、中種、帯屋町、大橋通りと練り歩き、大観衆を集め成功した。よさこい祭りは数々の不安材料を抱えながらも、回数を重ねるにつれ盛大さを増していった。少なくなかった批判や自省の声も、会合を重ね論議することでクリアしていく。第4回は警察から規制通告を受けるが、逆にこれが刺激となり参加団体が増えた。また、生バンドをトラックの荷台に載せて演奏しながら踊る形態も流行し、のちに地方車と呼ばれる踊り子を先導する車が出てきたのもこの頃からである。観光用映画製作、栈敷席特設など、祭りを盛大化させるための方策が数々と打ち出され、それに合わせ市民の熱意も高まっていった。テレビ中継も行われるようになり、ペギー葉山の「南国土佐を後にして」のヒットや映画ロケなど、土佐ブームを巻き起こしながら十数年を迎えた{よさこい祭振興会, 1994}。

2.2 ～1970年代・1980年代～

景気が上昇し明るいムードが漂う高度経済成長期には、よさこい祭りに対する人々の関心も高まり、年々と賞の数や賞

品も多彩で豪華さを増していった。1965年、高知放送が全国実況中継を始め話題になると、やがてNHKも放送を開始し、市民祭から県民祭へと知名度が浸透する。また、前夜祭の打ち上げ花火も、県内最大の夜のイベントとして欠かせないものとなった〔よさこい祭振興会, 1994〕。

1970年7月の大阪万国博覧会「日本の祭り」へ出場する際、「南国土佐を後にして」の作曲者であり、また高知県の著名な民謡研究家であった武政栄策氏は、テンポの速いリズムでの正調踊りを指示した。また、1972年2月のフランス・ニースカーニバルへの初参加に際しては、正調をサンバ風にアレンジした。これが呼び水となって、よさこい祭りでは、正調だけでなく様々にアレンジしたチームが現れた〔内田, 2011〕〔岩井, 2001〕。さらに、最初の頃は「日当を払って踊り子をお願いする」状況だったものが、「お金(参加費)を払って参加する」という状況に変わっていき、同時に、参加する踊り子の多くが若者という現象が生まれた〔森, 1998〕。この年は、「日本のまつり」十選の一つにも選ばれ、全国的に認知されるようになったことに加え、初の海外出演という記念すべき年になる。そして1975年の特徴の一つとして、高知市民憲章踊り子隊の結成があげられる。チームに所属していない人は踊ることができなかったが、お祭りの日の当日に参加できる開かれたチームである。老人クラブと子供会を中心に総勢200人が列をなし、その上、衣装は自由であった。それからは観光客の参加も多くなり、よさこい祭りの中で一つの重要なポジションを占めることになる。1978年、追手筋の本部競演場でも独自の地方車による演奏が認められた為、大音量の演奏合戦は一段と興奮をかきたてた〔よさこい祭振興会, 1994〕。

1980年代に入り、正調とはかけ離れたオリジナルの音楽、踊りが公式に承認された。その後、参加各チームの踊りは、チームごと自由に考案され、その創作性や振り付け、音楽、衣装などを披露し、競い合うようになる。定型の踊りの妙を競い合う徳島の阿波踊りとは全く異なる、参加チームが独自のストリート・パフォーマンスを競い合う、大規模な、いわばダンス・フェスティバルである〔内田, 2011〕。また、1988年は海外へ積極的にチームを派遣した年である。ドイツ・ハンブルグにジャパン・ウィークとして参加。続いてアメリカ、イギリスなどにも派遣し、各地で交流を深めている。高知のよさこい祭りでも、外国人の参加者も年々多くなり、国際的な広がりを感じるようになった〔よさこい祭振興会, 1994〕。

1988年(昭和63年)の第35回には107団体、総勢は約1万3千人の参加があり、お祭りは一層と賑やかさを増してきた〔よさこい祭振興会, 1973〕。

ここで、もう一度思い出していただきたいことは、そもそもの「よさこい祭り」の趣旨というのは、「地域住民の喜び、しあわせを生み出すチャンスにすること」と「地域の発展なくして商工業の発展なし」という一貫したスタンスを持ったお祭りであったということである〔岩井, 2001〕。

第3章 現状のよさこい祭り

上述のように、よさこい祭りはいわゆる5大要素と言われる「鳴子」「衣装」「楽曲」「踊り」「地方車」を見て聞いて感じる、楽しくも感動的なお祭りに成長した。その背景となる新しい踊りの創造の基本は、原点＝正調(成立時のスタイル)に常にフィードバックをしながら、正調を根本的に内包することにある〔岩井, 2001〕。第3章では、よさこい祭りの5大要素がどのように成長したのか「よさこい読本3号・7号・22号」の記事に基づきながら論述する。

3.1 鳴子

よさこい祭りの最重要ルールは、鳴子を持って前進して踊ることである。鳴子のルーツは、稲に群がるスズメを追い払うために揺らして音を出す田畑の道具「スズメ脅し」が由来である。朱色ベースに黄色と黒のバチがついた標準型を筆頭に、チームのコンセプトによってデザインや色などが異なる多彩な鳴子だが、音色や激しい踊りに耐えられる丈夫さも兼ね備えている。また、持ち方一つで音色も変わるため、踊り子たちも第一に鳴子の持ち方から学ぶ。ピシッと揃った鳴子の音色は鼓動となり、祭りを盛り上げるよさこいのシンボルである。

3.2 衣装

よさこい祭りにおいて、衣装とは自己主張が最もストレートにできるジャンルである。各チームとも力が入ったデザインを心がけており、よさこいの華やかさは、この競争意識のせいかもしれない。各チームのコンセプトに合わせた衣装は、少しでもセンス良く、目立つように作られ、またその時のトレンドも加わる。昔から基本的な衣装として受け継がれているのが、さらしを腹に巻いて法被をかけるというような、伝

統&日本調型である。法被にトレンド感のあるデザインを施し、カラーでチームを主張するものが多かった。しかし、現在では江戸前、スーツ、エスニック風、着物調など、露出度も上がり、デザイン性に優れるだけでなく、踊りやすさ、暑い夏を乗り切る通気性や機能性も追及され、細部に至るまでデザイナーの心遣いがいきわたる。「衣装が可愛いから、このチームで踊りたい」と踊り子がチームを選ぶ基準の一つにもなっている。

3.3 楽曲

作曲家、武政栄策氏が1953年(昭和28年)に、わずか5日間で制作を依頼され、一気に作り上げたのが「よさこい鳴子踊り」である。土佐に昔から伝わる民謡「よさこい節」がベースとなっている。そのフレーズを曲のどこかに必ず入れることを条件に、よさこいサウンドは自由となった。「民衆に受け入れられるのであれば、どんなに変わっていてもかまわない。」とは、ほかでもない作曲者である武政氏の言葉であり、ここによさこいの無限の可能性を感じる。1975年(昭和50年)頃は、レコードやエレキバンド、大道芸人風などがあり、この頃から多彩であったことに変わりはないが、今ではサンバ調や日本楽器を使った和調など、ストーリー性のある音楽も増え、踊り子や観客を魅了し続けている。

3.4 踊り

当初の基本的な踊り(正調)は、「よさこい鳴子踊り」を作曲した武政英策氏がアイディアを出した。阿波踊りの単純なデモンストレーションに対抗して、メーデーのデモを参考にしたジグザグ行進を提案した。これに、花柳流ほか日本舞踊五流派の師匠たちが、直線に打つことと曲線的に回すことの組み合わせで鳴子を打ち鳴らす、ダイナミックな行進踊りを振りつけた{よさこい祭振興会, 1973}。100人前後の踊り子が織りなす群舞は壮観で、練習の成果を存分に発揮した一糸乱れぬ踊りや、バラバラだが個性が光る踊りなど、一人ではなく団体なので誰もが安心して自分をさらけ出している。そして、その輝きに反応する人が個人賞のメダルを授与する各地区の審査員である。それぞれ独自の審査基準で選考しているが、上手な人、張り切って踊る人、一生懸命踊る人、ユニークな人などが主な基準となり、共通する最大のポイントは笑顔である。観客と踊り子が近い高知の会場では、踊り子の熱気もダイレクトに伝わり迫力満点である。

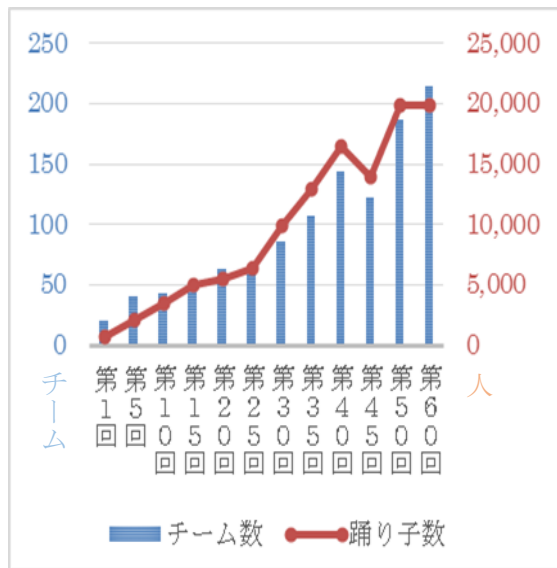
3.5 地方車

地方車とは踊り子隊を先導していく車のことをいう。地方車には色々な役割があり、まずはチームカラーをPRする広告塔としての役割がある。そして、荷台は生演奏のためのステージとしての役割も果たす。また、運転席は通信・指令本部となる。ほとんどのチームが、前日の9日から11日まで3日間のレンタルでトラックを調達するため、飾り付けは前日からの徹夜の作業となる。80年代の地方車には、バンドが乗り込み、奏でる素敵な演奏に合わせて踊り子がステップを踏んでいた。最近では、PAと呼ばれる音響機器や照明を積み込み、踊り子を鼓舞するチームの司令塔的存在ながら、美しい電飾を纏ったりシャボン玉の仕掛けがあったりと、観客を盛り上げている。しかし、地方車には公道を走るための様々な規制がある。安全性はもちろんのこと車の長さや高さの規制があり、その限られたスペースゆえに様々な工夫が生まれた。装飾と安全性のどちらも優れている地方車には「地区競演場連合会地方車奨励賞」が授与される。踊り子隊と地方車はチームカラーの表現であり、これらの比較も見どころの一つである。

これらの5大要素を踏まえ、よさこい祭りは、幅広い踊り子層によるパフォーマンスが確立していることや、現代の音楽・踊り・衣装を駆使した多種多様な表現と価値観が共有されていること、それらの制作を、ほとんどが地元の高知で毎年新調していること、そして何よりも嬉々とした自己表現に生きていることへの確認を見出していることで、地域密着型のお祭りとしての地位を確立してきた{岩井, 2001}。非常に多彩なバリエーションを見せているよさこい祭りは、常に進化を続けていると言ってよい。

第64回となった今年度は、205チーム・約1万8千人の踊り子が参加し、延べ約100万人以上の観客を集める四国有数のお祭りに成長した{高知新聞, 2017}{内田, 2011}(参加者の推移は図1を参照)。

〔図1〕 よさこい祭りにおける参加チーム数と踊り子数の推移(出典より作成)



※出典：よさこい祭振興会(2004)「よさこい祭り50年」
 ：よさこい祭振興会(2013)「よさこい読本
 VOL 2 2」

第4章 課題

上記で述べたように進化を続けるよさこい祭りをみると、規模は格段に大きくなり、多種多様な表現が自由に展開してきたと言える。その為、よさこい祭りの本当の魅力とは何なのか、を考えないまま勢いに任せて大きくなってきたのではないかと考えられる。それにより、お祭りのこれまで作り上げてきた歴史と、我々が見ている現状に大きな違いが生じている。そこから、踊り子の若齢化や参加費の高騰、賞の過剰評価など新たな課題が見えてきた。

1992年の高知新聞には「楽しいならいいか!」という記事が紹介された。そこでは、よさこい祭りに20年近く参加しているという女性にインタビューをしており、「一万五千元や二万円という高い参加費を、中高生がハイッと簡単に出すのが不思議。それだけみんな踊りたいということなのでしょうが、昔は日当を貰って踊っていたのに」と書かれている{高知新聞, 1992}。また、1995年の高知新聞には、常連の老舗商店街が参加を取りやめたケースを紹介している。26回出場の方々商店街振興組合は「あまりにも金がかかりすぎ、気軽に参加できる市民祭から外れてきた。一度休んでみた」と不参加を表明した{高知新聞, 1995}。ここでは、参加費の高騰や地域に根差すチームに衰退の気配が見えることに対して懸念を表

しているが、これはよさこい祭りが「商業化」していることの影響によるものだと考える。実際に筆者が行ったインタビューでも、各チームの運営費負担が決して小さくないことが示されている(図2参照)。他にも、これにより新たな課題を生み出している。

お祭りに参加するためには、チームに所属することが必要であるが、そのチームは規定を満たせば自分で作ることが出来る(詳細な規定については、高知商工会議所連合会, 2017を参照)。しかし、お祭りの規模が大きくなったことにより、チームを立ち上げる為には膨大な資金が必要となった。その為、ほとんどのチームが企業等とスポンサー契約を結んで参加するようになり、それに伴いスポンサーの力がお祭りに大きく影響するようになった。よさこい祭り競演場連合会の会長を11年務めた岡崎直温氏によると、「お祭り内での「賞」の過剰評価が気になり始めている。見せる・見られることを過度に意識して、チームのグレードアップ競争が激化し、入賞チームとそれ以外の一般チームとの格差が生まれつつあると感じた。そのような流れの中で私は、本来、楽しむことを目的としたよさこい祭りに入賞至上主義ともいえる考えが芽生えつつあることを危惧している。」と述べている{岡崎, 2006}(図3参照)。賞は楽曲や衣装、振り付け等で優れているチームに贈られるもので、受賞したチームだけが4日目に行われる後夜祭に出場できるとあって、どのチームも受賞を目指して日々練習に励み、汗を流している。だが、その賞を決める審査基準は公表されているものの、チームごとの得点や審査員の名前などは一切公表されていない(詳細な審査基準については、高知商工会議所連合会, 2017を参照)。その為、高知県に大きな影響を与える企業がスポンサーとして支えるチームには優位な結果が与えられるのではないかとという疑問が生じる。仮に、そうであるならば、弱小でコストがかけられない多くのチームや踊り子のモチベーションは低下すると考えられる。これは、よさこい祭りの発展にとって決してよいことではない。

私は、これらの課題があることにより、これからのよさこい祭りの発展が滞るのではないかと危惧している。

〔図2〕チームの運営費

第1回から参加 64回出場のチーム(150名)	4年前に初参加 3回出場のチーム(100名)
▶楽曲 30万円	▶楽曲 40万円
▶振付 40万円	▶振付 20万円
▶衣装 1万円 (1人当たり)	▶衣装 1万2千円 (1人当たり)
▶地方車 100万円	▶地方車 145万円
▶雑費 50万円 (飲物・お弁当・交通費・ 保険)	▶雑費 130万円 (飲物・お弁当・交通費・ 保険・ボーカル)
▶祭り参加費 5万円	▶祭り参加費 5万円
	▶練習場所代 25万円
総費用 約350万円	総費用 約500万円

出展：よさこいチームのスタッフへのインタビューにより作成

〔図3〕第64回(2017年)本祭受賞チーム

よさこい大賞 十人十彩
金賞 旭食品 濱長花神楽 とらつくよさこい(ちふれ)
銀賞 ほにや 俵屋グループ ダイヤモンドダイニングよさこいチーム
審査員特別賞 総合クラブとさ「青龍」 同志社大学よさこいサークル「よさ朗」 あたごまち愛組氣炎一座
地区競演場連合会奨励賞 万々商店街 万々歳 au 上町よさこい鳴子連 帯屋町筋 セントラルグループ踊り子隊 京町・新京橋「ぬびす・しばてん連」 NTT ドコモ サボタージュ 上総組 天空しなと屋 しん 帯屋町筋ジュニア隊
地区競演場連合会地方車奨励賞 梶原 高知信用金庫 ちかもり

出展：南国土佐・高知よさこい祭り公式 Web Site 受賞チーム一覧より作成

第5章 改善策

よさこい祭りの様々な課題については、よさこい祭振興会でも度々議論をされている。例えば、1999年11月、高知青年会議所は「よさこい祭り21世紀への指針～まちとまつりを考える～」について、アンケートなどを実施してよさこい祭振興会に提言した。提言は、①祭りの規模の現状維持、電車通りの競演場は困難、これ以上の派手さへの疑問などが市民意識としてあること、②仕事や金銭的負担、体力面から踊るのをやめた人が多いことなどを踏まえ、参加しやすいチーム形態、踊り子のOB・OGが裏方として参加できる方法の検討、を求めている。また、今後の改善のポイントとして、①チームと競演場の関係の検討、②高齢化や人手不足、資金不足の中、運営難が進む地区競演場を支援するため、チームごとに競演場の運営要員を出し合う“フランチイズ制”の導入(これによって交流の促進、次世代の運営スタッフの養成、OBやOGの活躍の場づくりができる)、③交通整理や写真などの記録班、障害者のための補助者など、多くのボランティアが参加できる仕組みづくり、④事務処理が限界を超えていることから、事務局体制を見直し、常設・専任の「新振興会」の設定、の4つを挙げている{岩井, 2001}。これを踏まえ、よさこい祭振興会は事務局機能を強化し、祭り本番に向けて関係団体との連携やPRを積極的に進めるため、2016年4月から専任職員2人を配置することとした{高知新聞, 2016}。また、運営基盤の強化のため、主催団体を一般財団法人化することを視野に入れて県や市などと共に、体制見直しの検討も始めている{高知新聞, 2014}。

よさこいの未来を考えた声は、多くのチームの内部からも聞こえてくる。「“見る”ではなく“参加”、“ショー”ではなく“一緒に”誰でも自由に参加できるお祭りにする」、「反省会を開き、チームの意識を変えていくことも必要」等である。また、賞に関しては「ジャンル別に受賞チームを分けられないものか」、「ある程度受賞したチームは殿堂入りにする」などして、いろんなチームが受賞できるように工夫したい{高知新聞, 2013}といった声も聞こえている。私自身も、お金を懸けた者勝ちのような見た目重視の審査には違和感を覚えており、年々と派手さを増している地方車の装飾や衣装などの金額に一定の上限を設けることを提案したい。また、出場した全てのチームが追手筋を踊れるように、日程を調整することも必要かもしれない。

これからもよさこい祭りが発展していく為には、上記で述

べたようなお祭りの構造的課題を検討することが必要な時期に來たのではないかと考える。

第6章 まとめ

よさこい祭りは今年で65回目を迎える。高知で生まれたイベントが、長い歴史を築き上げ、全国的にも広がりを見せていることは、県民としてとても嬉しいことである。皆の平和や愛を祈って作られたよさこい祭りは、開放的で自由な気質を持った高知の県民性により、自由、多様性、開放性をキーワードにここまで進化させてきたと言える{岩井, 2005}。その為、地元の人々で手を取り合ってこれからもお祭りを作り上げていくべきだろう。

本研究で取り上げた課題を整理すると、以下のようになる。

- ①チーム運営費の増大
- ②参加費用の高騰
- ③賞の過剰評価

これまでよさこい祭りの発展を検討してきたと思うことは、お祭りは確実に変化し、成長し続けているということである。私自身も関わってきた十年程を振り返ってみて、お祭りに対する考え方に変化を感じている。ただ、そこは変化するお祭り「よさこい祭り」である以上、受け入れて次世代へと伝承していくべきだと考える。これからも、よさこい祭りの成長を見守りながら、仲間たちと楽しんでお祭りに参加していきたい。そして、高知の一大イベントとしてますます盛り上がることを期待している。

第7章 参考文献・引用

- [1] 岩井正浩(2001)「よさこい鳴子踊進化論序説」
神戸大学発達科学部研究紀要, 8(2):211-224
- [2] 岩井正浩(2005)「よさこい鳴子踊り進化論(4)
:100回大会への序曲」神戸大学発達科学部研究紀
要, 12(2):279-296
- [3] 岡崎直温(2006)「よさこいはよさこいじゃき」
イープレス出版
- [4] 高知商工会議所よさこい祭振興会(1994)
「よさこい読本 VOL 3」よさこい祭振興会
- [5] 高知商工会議所よさこい祭振興会(1998)
「よさこい読本 VOL 7」よさこい祭振興会
- [6] 高知商工会議所よさこい祭振興会(2013)
「よさこい読本 VOL 2 2」よさこい祭振興会
- [7] 高知商工会議所連合会(2017)
「第64回よさこい祭り参加チーム代表者会」
<http://www.cciweb.or.jp/kochi/yosakoiweb/index/rule.pdf>
- [8] 高知新聞(1992. 8. 10)
- [9] 高知新聞(1995. 8. 13)
- [10] 高知新聞(2014. 1. 1)
- [11] 高知新聞(2016. 3. 31)
- [12] 高知新聞(2017)「初日から最高潮 第64回よさこい祭り本番幕開け」(閲覧日: 2018年1月16日)
<https://www.kochinews.co.jp/article/117997/>
- [13] 高知新聞(2018)「よさこい65年、発祥の地・高知市で原点回帰へ」(閲覧日: 2018年1月2日)
<https://www.kochinews.co.jp/article/149436/>
- [14] 森正(1998)「よさこい祭りについて(詳細)」
(閲覧日: 2018年1月4日)
<http://www.yosakoi.com/jp/AboutYosakoi.html>
- [15] よさこい祭振興会(1997)「南国土佐・高知よさこい祭り公式 Web Site」(閲覧日: 2017年12月27日)
<http://www.cciweb.or.jp/kochi/yosakoiweb/>
「受賞チーム一覧」
www.cciweb.or.jp/kochi/yosakoiweb/award/
- [16] よさこい祭振興会(1973)「よさこい祭り 20 年史」高知企業株式会社出版部
- [17] よさこい祭振興会(2004)「よさこい祭り 50 年記念誌」よさこい祭振興会
- [18] 早稲田大学日本地域文化研究所編(2011)「土佐の歴史と文化」行人社
部分タイトル: 内田忠賢「高知よさこい祭り」